

日本キリスト教会大阪北教会

2016年4月17日(日) 礼拝説教 牧師 森田幸男

聖書 ヨハネによる福音書21章15～19節

15 食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペトロが「はい主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。16 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロが、「はい主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたがご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。17 三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペトロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛している事を、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊の世話をしなさい。」18 はっきり言うておく。あなたは、若い時は、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」19 ロがどのような死に方で、神の栄光を現すようになるかを示そうとして、イエスはこう言われたのである。このように話してから、ペトロに、「わたしに従いなさい」と言われた。

説教『あなたは、わたしを愛するか』

◆今日わたしたちがご一緒に読みます聖書の箇所は付録の部分です。20章でこの福音書は一応終わりました。しかし、これだけは書き添えなければならないと思った後の人が21章を書き足したのです。先週ご一緒に読んだところは、ペトロ達7人の弟子達がエルサレムからガリラヤに戻り、漁に出た話でした。これをある人達は、イエス様から伝道の委託を受けているのに、また元の漁師に戻ったのだと解釈しています。これは誤解です。弟子達が最初イエス様に従ったのは、ガリラヤ湖でした。彼らは全てを捨てて、魚ではなく、人間を取る漁師として、イエス様に従ったのです。しかし結局、彼らはイエス様を見捨てて、イエス様御一人が十字架に架かられたのです。しかし、復活されたイエス様が彼らに現われなかって、「わたしが父から遣わされたように、わたしもあなたがたを遣わす」と、非常なる使命を託されたのです。それで、弟子たちはもう一度原点に立ち戻り、生前のイエス様が何を語られ、何をなさったのか、そしてそれに対して自分たちはどうであったのかを、もう一度、始めに、根源に立ち返るために、ガリラヤに戻ったのです。

◆その所は先週読みました。そして今日の箇所です。ここでも弟子達は夜通し働きましたが、何も取れませんでした。すると岸边に立つ人が「網を右に降ろしなさい」と言うものですから、そうすると大きな魚153匹の大量です。これは当時の知られていた魚の全種類ですから「全て」の意味です。この岸边の人はイエス様ですが、その指示に従う時、主イエス様の御言葉が実現するとの暗示がここにあります。あの最初の時は、「沖へ漕ぎ出し、漁をしなさい」と言われました。あの時はしゅしゅやってみたら、以外にも大漁でした。今度は「網を右に降ろしなさい」と言わ

れたら、間髪入れずに右に降ろします。その結果は大漁でした。このようなことが起きて、その岸辺の人がイエス様であることに気づき、彼らは岸に戻り、生前、イエス様と繰り返し行ったように、朝食を共にするわけです。そして今日の箇所へと続くわけです。

◆「食事が終わると、イエスはシモン・ペトロに、『ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか』と言われた。」わたしは今回、今日の聖書を読みながら、本当に私達は、聖書を神様の御言葉として、真に受けてきたかを、問われました。付録は訳もなし載せられものではありません。弟子達は今、復活のイエス様と食事をしています。生前イエス様と共にするのと全く同じ様にガリラヤ湖で朝食をとるのです。これだけの記述だけでも皆さん、不思議ではないですか。ところが彼らは今、この事を不思議と思わないのです。イエス様はそういうお方だと知っているのです。食事が終わると、イエス様はシモン・ペトロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と問われます。ペトロが「はい主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と言うと、イエス様は「わたしの小羊を飼いなさい」と言われます。この問答が三度繰り返されます。さすがにペトロは悲しくなると書いてあります。

◆私はここを読んでおりました、人は誰にも話せない過ち、秘密を抱えて生きている者だと改めて思いました。ペトロの場合、イエス様が捕えられ、裁きを受けている時、中庭まで入って行っています。そして3人の別人から「あなたはあの人の弟子だ」と指摘されますが、「違う」と否認しました。ペトロがイエス様との関係を3回も否認した事実を知っているのはペトロ本人だけです。他の弟子はそこに居合わせなかったのです。ですからペトロが黙っていれば、ペトロが土壇場で、イエス様との関係を3度も否認したことは誰にも分かりません。ところが、弟子達は、復活の主イエス様から、途轍もない伝道の使命を委託されました。しかしペトロにはこの裏切りの秘密があるわけです。誰にも明かしていません。しかしこの問題が、ペトロの心を捕えていました。本当の伝道は、全ての捕われから解放され、自由にされていないとできません。今日の箇所では、復活のイエス様の御臨在さえも、不思議に思わないペトロになっています。しかしまだここに、ペトロ本人だけが知っている秘めごとがありました。それは誰も知りません。そのペトロの秘めごとを知っているのは弟子の中にもおりませんし、ペトロはイエス様も知られるはずがないと思っていました。しかし、イエス様はそれを知っておられました。イエス様は知っておられます。

◆本福音書の13章36節を開いて下さい。『ペトロの離反を予告する』という所です。「13:36 シモン・ペトロがイエスに言った。『主よ、どこへ行かれるのですか。』イエスが答えられた。『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることはできないが、後でついて来ることになる。』13:37 ペトロは言った。『主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。』13:38 イエスは答えられた。『わたしのために命を捨てると言うのか。はっきりしておく。鶏が鳴くまでに、あなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。』これはイエス様の予言なのですね。「あなたのためなら命も捨てます」とペテロは言いましたけれども、鶏が鳴く前に、夜が明ける前にペトロは、「違う、違う、違う」と否認しました。イエス様の予言通りに。

◆それで先週の聖書読む会でも話したのですが、神様の御言葉、イエス様のお言葉は全て、必ず実現いたしますし、主イエス様は、復活後も復活前も、何処にも、如何なる時にも、「共に居ます」御方です。そして全てを見抜いておられる御方です。ペテロが、「否認」に追い込まれる厳しい極限までついてくるということも、ついて来るけれど、ぎりぎりのところで挫折することも既に見抜いておられる御方です。ですからペテロの三度の否認を、事前に・事後に知っておられるのはイエス様だけなのです。ただ、イエス様は今日の箇所で、「あなたは私が言った通り、私を三度否認しましたね」とはおっしゃらないのです。時には「サタンよ、引き下がれ」とズバツと言われる方ですが、今日のところでは「あなたはわたしを愛するか」と三度、問われるのです。20節に「ペテロが振り向くと、イエスの愛しておられた弟子がついて来るのが見えた」とあります。ですから、この会話、問答は、イエス様とペテロ二人だけのものです。

◆イエス様は、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と問われました。これは一つの訳です。「この人たち」というのは「これらのもの」と訳してもいい言葉です。「これらの人」と訳してもいい言葉です。ですからこれが翻訳の難しさです。先程少し触れましたが、「153匹」というのは、当時知られていた魚のすべてという意味でした。「世界中の人々」を暗示する表現です。伝道の大成功を暗示しています。また他の者がどうのこうのと云うのでもなく、他の何者と比較してというのでもなく、ほかのどんなものと違って、桁も違う、何もかも違って「ただわたしを愛するか」と問い給うのです。この前のトマスは、「わたしの主、わたしの神よ」と告白しました。つまり「わたしの主、わたしの神よ」ということは、他に比べるものはなにもない御方ということです。

◆もう一度、今日の箇所を読んでみましょう。＜ 食事が終わると、イエスはシモン・ペテロに、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と言われた。ペテロが「はい主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの小羊を飼いなさい」と言われた。⑯二度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペテロが、「はい主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」と言うと、イエスは、「わたしの羊の世話をしなさい」と言われた。⑰三度目にイエスは言われた。「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」ペテロは、イエスが三度目も、「わたしを愛しているか」と言われたので、悲しくなった。そして言った。「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛している事を、あなたはよく知っておられます。」イエスは言われた。「わたしの羊の世話をしなさい。」＞このことによってペテロは、イエス様が「わたしはあなたのためなら命を捨てます」と言った時、鶏が鳴く前に三度あなたはわたしを知らないと言うと言われたこと、自分しか知らない秘め事をイエス様があの時に予言された。そしてわたしが実際そうしたことをイエス様をご存じなのだ、気付くわけです。「悲しくなった」という表現は、色々の含みを持ちますが、悲しくもなったけれど、彼は人生において初めて、「恐ろしい」と思ったのではないのでしょうか。イエス様は何もかも見抜いておられます。常に、とこしえに。生前イエス様が裁きを

受けている時、ペトロは庭にいたから全然違う場所いたわけで、三度否認したことはイエス様には聞こえないわけです。だからペトロは自分しか知らないと思っていましたけれども、生前のイエス様はそのことも知っておられた。今申し上げていることは、そういうことをこのヨハネ福音書の付録は書いているのだということが今回分かりました。

◆イエス様はこういうことも言っておられます「わたしと父とは一つである」(10章30節)。この意味はこうです。「わたしと父とは一つである。世の初めから。そして生前も。そして十字架にかけられ、蘇った今も。そしてこの後も、とこしえに。わたしと父とは一つである。」それだけではなく、「わたしとペトロは一つである」とも言っておられるのです。今申し上げていることは、ヨハネによる福音書の序の賛歌の冒頭に出てきますね。そこに言われていることの実体化です。そこで言われていることは、イエス様は世の初めから神と共におられたと書いてあります。これはわたしたちも頭をひねっても合点がいかない。けれどもペトロは今三度イエス様から「わたしを愛するか、」と問われることによって、彼は聖なる恐怖に捕らわれたと思うのです。イエス様というお方は自分がどこで何をしてもそれをすべて見ておられる。聞いておられる、そしてわたしの心の思いを全て知っておられる。そういう事をペトロは今日、経験しているわけです。

◆これがキリスト教の信仰です。この悲しみ、畏れを通して、ペトロは初めて罪責感から解放されたのです。主イエスは、このような者を赦して、受け入れ、そして「わたしの羊を飼いなさい」と、イエス様ご自身の御業を、この三度も否認したペトロに託しておられるのです。わたしたちは実際の「羊飼い」をそばで見る機会はないのですが、イスラエルでは、羊飼いがどのようなものは日常の見聞です。詩篇23篇の「主はわが牧者なり」はイスラエル万民の愛唱詩篇であり、信仰告白と言ってもよいと思います。我々がどんな危険なところにあっても、牧者なる神様は共にいますと告白しているわけです。それが牧者であり、神様、イエス様なのです。イエス様はこのヨハネ伝で、「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる」と言われました。そして本当にその通りにイエス様は歩まれ、今もその歩みをしておられる。ご自身の牧者としての業をペトロに託すわけですね。

◆そして18節で、「はっきり言うておく。あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる。」これは当時格言であったと言われていますが、ペトロがどのような死に方で、神の栄光を現わすようになるかを示そうとしてイエスはこう言われたのです。このように話してからペトロに「わたしに従いなさい」と言われます。これは最初ガリラヤ湖で沖へ漕ぎ出して大漁だった、そのあと、彼らは「すべてを捨ててイエスに従った」と書いてあります。ところがイエス様が捕えられて裁きを受ける時、三度もイエス様との関係を否認したのです。従いきれなかったのです。しかしイエス様はここでもう一度「わたしに従いなさい」と言われます。これは命令形ですね。つまりイエス様がおっしゃったことは命令であろうがどんな言葉であっても、それは必ずその言葉を実現されます。私たちは挫折もします。しかしイエス様は私たちの挫

折に負けるようなお方ではないのです。「従いなさ」と言ったその人から目を離すことはなさらないのです。イエス様はそういうお方です。一度言ったら、その言葉を貫かれます。イエス様をその人を信じて、その信頼をどこまでも貫かれるお方です。

◆このような次第でありまして、牧者の務めは命がけです。その手本は主イエス様以外にありません。ですから、ペトロは本当にイエス様に従ったのです。外典である『ペトロ行伝』によれば、ローマで殉教の死を遂げたとされますが、実際、その墓はどこにありますかと聞いても、誰も知らないのですね。イエス様と同じ十字架にかけられての死は、誉れある死に方ではないですね。「イエス様を拝する。」この一事の中には、何をもってしても変えることのできない、貴いイエス様との関係、交わりがあります。わたしたちには、この一事で十分なわけです。ですからイエス様は、「わたしと父とは一つである」とおっしゃいましたが、ここに至ってペトロは、「わたしとイエス様とは一つである」との確信に導き入れられております。本当に有難いことです。

◆「イエス様はわたしを見捨てるようなことは金輪際なさらない御方であられることが本当によく分かった」ということでないでしょうか。このように読んでまいりまして、ここは付録として、どうしてもペトロの三度の否認を、「わたしを愛するか」と、三度繰り返し問われ、その否認を、一つ一つ消して行かれる、主イエス様の極限の優しさがあります。そのイエス様を証するために、どうしてもイエス様とペトロとのこの対話はなければならなかったのです。この対話なしにペテロは伝道に出で立つことはできない。そういう意味で私たちもペトロ同様に挫折するのですね。誰にも言えないような過ちも犯すのですね。けれども、私たちがどのような者であれ、どのような状態になっても、イエス様は共にいることを貫いてくださるのです。それ故に、わたしたちは生きることができます。ですから牧師も牧者ですが、イエス様はあるとき、「民衆と弟子達と一緒に呼び寄せて、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい」と言われました(マルコ 8:34)。ですから弟子だけが特別ではないのです。人々一人一人が、イエス様によらなければ、ほんとうの自由を得ないのです。何がなくてもイエス様と一つであるということの中に、わたしたちの力、命、すべてがあるのですね。来週は伝道集会です。イエス様が「わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう」とおっしゃいました。これをイエス様は、必ず実現して下さる。イエス様とわたしは一つであられると喜びをもって告白するという、そこに立ってはじめて伝道できるのでないでしょうか。これは間違いありませんと保証ができるのでないでしょうか。

お祈りいたします

憐み深い主イエス・キリストの父なる神様

わたしたちがあなたを忘れ、あなたを裏切る時にも、あなたは共にいまし、わたしたちの一切の負い目を肩代わりしてくださいます。どうか、わたしたちもあなたと一つにされた者として、あなたを信じ、あなたに従う者とならしめてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通しみ前におささげいたします。アーメン。